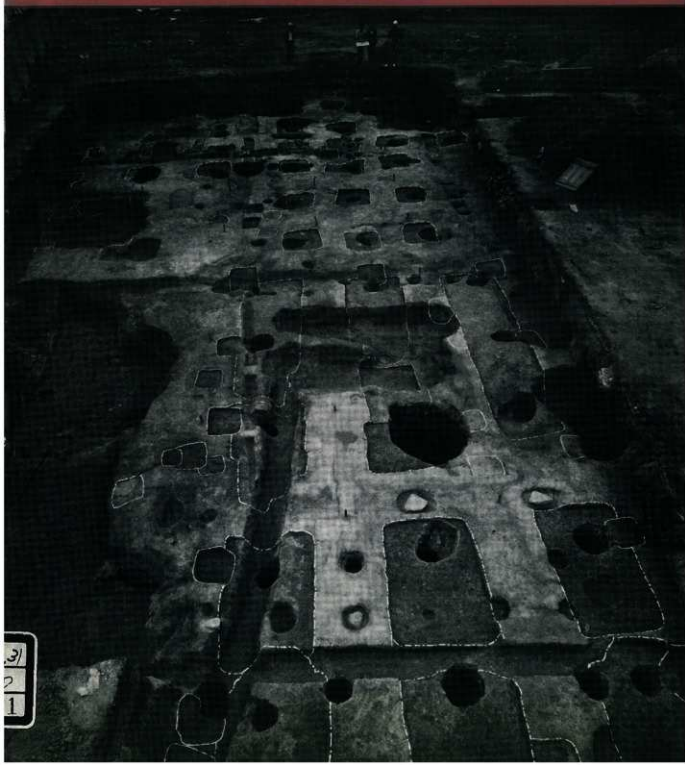


難波宮跡

難波宮址顕彰会



31
2
1



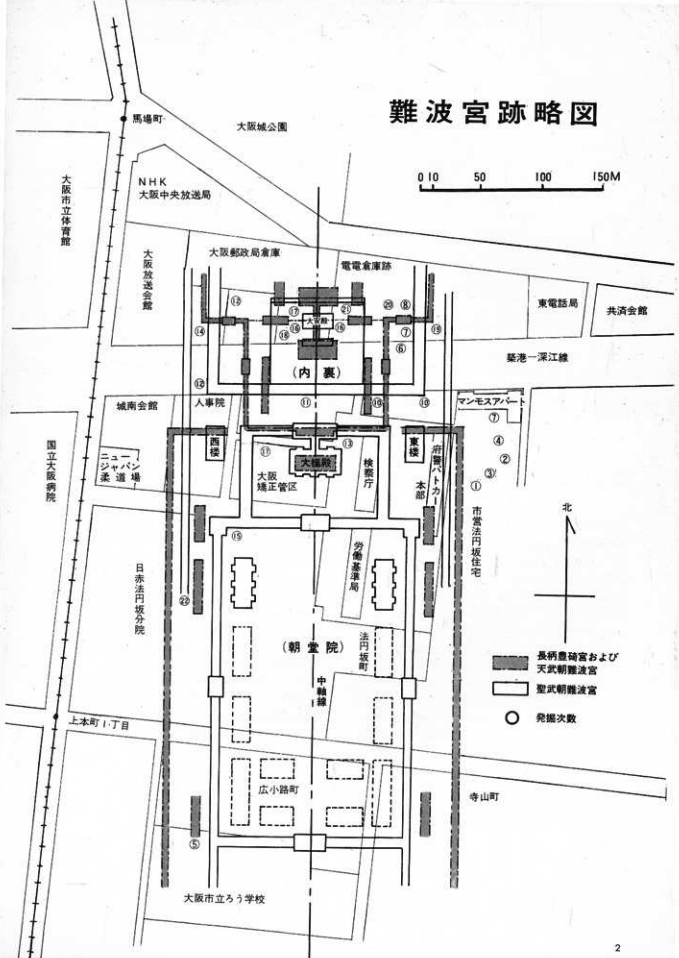
難波宮跡全景（航空写真）。白線で示したのは長柄豊碓宮および天武朝難波宮の内裏・朝堂院を中心とした部分。全城はさらに周辺にひろがっていたと推定される。

山部宿祢赤人の作れる歌一首

天地の 遠きが如く 日月の 長きが如く
 押照る 難波の宮に わご大王 国知らすらし
 御饌つ国 日の御調と 淡路の 野島の海人の
 海の底 奥つ海中石に 雙珠 多に潜き出
 船並めて 仕へまつるし 貴し見れば

難波宮跡略図

0 10 50 100 150M





才22次発掘現場。中央左よりの柱穴
がわが国最古の朝堂院西第二堂の跡

難波宮跡保存の意義

大阪市は東京都とならんで日本を代表する大都会である。世界においても有数の大都市といってよいであろう。

しかし大阪は1日にして成ったものではない。イタリヤの首都ローマがそうであったように、大阪もほとんど歴史以前にさかのぼるほどの古い歴史をもっている。1千年以上むかしに栄え、いまもなお、現代的意味をもって発展をつづけている都市は、世界にもそう多くはないであろう。大阪は実にそうしたかすかなる都市の一つである。

その大阪の古代における繁栄のあとをものがたるものが、難波宮跡である。それは古代日本の首府の一つとしてさかえた大阪の歴史を、今日まざまざと伝えてくれる貴重な遺跡であり、世界にほこるにたる大阪の特色を何よりもよく示してくれる歴史的記念物なのである。

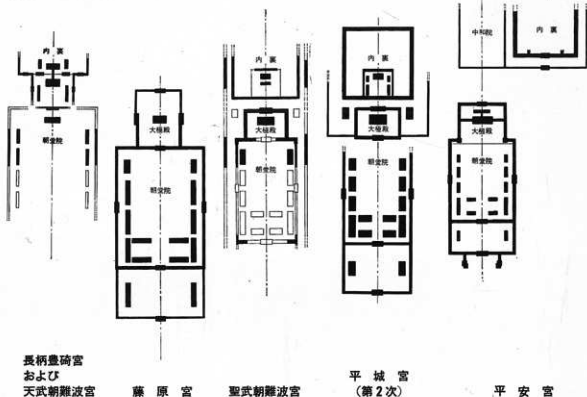
難波すなわち古代の大阪にはじめて都をおいたのは、応神、仁徳両天皇であるが、その宮跡はまだ発見されていない。今日調査が進み、論議がたかまっているのは、7世紀中ごろの孝徳朝から8世紀末の桓武朝にいたる約150年間の難波宮である。この150年間に、多少の断続はあるが、首府または離宮としてはほぼ一貫して難波に皇宮が存在したことは、日本書紀以下の正史によって確認される。そして昭和29年より開始された発掘調査によって、上町台地の北端に近い地域——東区法円坂町——に、少なくとも前後二つの時期に区別される宮殿跡が、重なって遺存することが明

らかになった。その新しいものは、聖武天皇朝（8世紀中ごろ）を中心とする奈良時代の難波宮、古いものは天武天皇朝（7世紀後半）の難波宮と考えられる。調査は途中であって、まだ全貌を明らかにするには至っていないが、天皇の日常の住居である内裏と、朝廷の中心の建物である大極殿の大体、および政治を行なう場所である朝堂院の一部が判明して、学界をおどろかした。とくに天武朝の宮殿跡は、今日知られる最古の宮殿遺構であって、その発見は大きな反響をよびおこした。

それはただ古いから貴重というだけではない。天武朝という時代は、大化改新から奈良遷都にいたる約半世紀のほぼまんなかに相当する。この半世紀は、日本が律令制を整え、強力な統一国家が最後の完成する、古代史上もっとも重要な時期であるが、その中心に位置するのが天武朝である。難波宮跡は、このような歴史的意義をもつ天武朝の実態を解明するのに、このうえなく重要な遺跡なのである。

しかし問題となるのは、天武朝の難波宮だけではない。およそ古代の政治機構や朝廷の組織は、宮殿の配置の状況によって察することができる。その意味では、聖武朝の難波宮跡も天武朝のそれに劣らず大切である。また、飛鳥・藤原・平城・長岡等の各宮跡についても、同様なことがいえる。これらの諸宮跡の遺構が明らかになった場合、それを総合して観察するならば、今日現存する文献だけではわ

内裏・朝堂院比較図(同一縮尺による)



長柄豊碓宮
および
天武朝難波宮

藤原宮

聖武朝難波宮

平城宮
(第2次)

平安宮

からない古代日本の国家体制の発展のあとを、具体的に知ることができるのである。天武朝と聖武朝の2時期にまたがる難波宮跡の完全な調査と保存が必要とされる理由の一つである。

さらに注目されるのは、調査の進むに従って、天武朝の宮殿が、大化改新に際して建設された孝徳朝の難波宮(難波長柄豊碓宮)の建築を、そのまま利用した可能性が高まってきたことである。日本史上における大化改新の重要性についてはいまさらのべるまでもないが、その実際の経過や歴史的性格については、とくに近年論議が多い。難波宮跡の今後の調査によって、天武・孝徳両朝の宮跡の関係が判明することが期待されるのであるが、それはこのように問題の多い大化改新の研究を飛躍的に発展させることにならなければならない。

そのほか、難波宮跡の調査は、建築史の面からも、大勢文化受容の歴史の研究上からも重要な意義をもつが、上にのべたように、古代国家形成史の研究についてだけいっても、その価値はきわめて大きいのである。

しかし、世間には往々、古代の遺跡は学問上重要であっても現代人の生活に貢献するところが少ないとして、遺跡の保存について冷淡な考えをもつ人がいる。遺跡の存在は土地の開発利用を阻害するものとして、保存に反対をとる人もある。けれどもそれは、見識のせまい近視眼的な

考えというべきであろう。土地はそれぞれの性格をもつものであって、性格に応じた利用のしかたをするのが高度の開発である。難波宮跡の地は、大都市大阪の中心にあるが、それゆえにこそ、史跡として保護し保存することが必要なのである。完全な調査の実施と平行して、ここに遺構の復原、遺物の陳列等の施設をもうけ、周辺を緑地化し、教養と保養のセンターとして活用することが望ましい。とくにみどりに乏しい大阪市としては、大阪城公園につづくこの地域を、緑地として保存することは、高度の都市計画の立場からみても、もっとも望ましい処置ではなからうか。

大阪の府・市民はもとより広く国民が随時、緑につつまれた難波宮跡の地をおとずれ、教養を高めつつ、同時にあすへの活力をたくわえる目のくるところを、わたくしは希望するものである。そうした環境のなかでおのずから育てられる歴史的感受は、人間性に深みを与えとともに、合理的なものの考えかたを養うであろう。このような保存が実現した場合、難波宮跡は大阪の健全な発達はもちろんのこと、国民的財産である史跡等古文化の保存と活用にもっとも役立つにちがいない。

(大阪市立大学助教授 直木孝次郎)

難波宮の歴史

古代においては、天皇の宮室のもうけられた地が政治の中心となった。わが難波においては、今から1500年ほど前の古墳時代の中頃に、応神天皇の「大内宮」・仁徳天皇の「高津宮」が営まれ、古代大和政権の発祥地とも中心地ともなっていたと伝えられている。

6世紀以後は、欽明天皇「祝津宮」の記録が見られるが、もっぱら新羅・高麗や百済などとの交渉の玄関口として重要な位置を占めていた。さらに推古15年（607）の遣隋使の派遣以来、遣唐使の発着や隋・唐・朝鮮・渤海国等の使人の接待が難波で行なわれた。難波は大陸文化摂取の窓口として重要視されていたのである。

大化元年、蘇我氏をたおした中大兄皇子らは、孝徳天皇を即位させ、都を難波の長柄豊碓の地におくことに決定した。（その遺跡が法円坂町にあることは、最近までの調査ではほぼ確定となってきた。）新宮の造営は、短化人の指導監督のもとに、運河の改鑿などの大土木工事と並行して行なわれ、孝徳天皇が新宮に入り難波長柄豊碓宮と称したのは遷都後7年目の白雉2年（651）のときであった。

さらに工事は、翌年まで続けられたが、完成した宮殿は、いっつくもしいほど立派であったといわれている。この宮の造営のために、墓を破壊されたり家を移転させられた人達には、物を与えて補償をしたという記録も残されている。また新宮の完成までの7年間に、天皇は、子代難波蝦蟇宮・小郡宮・難波碓宮・味経宮・大郡宮など難波にあった宮を転々と移つた。

宮完成の翌年の白雉4年（653）、改新の中心人物の中大兄皇子は、孝徳天皇を独り難波に残して大和の飛鳥へ遷つてしまった。翌白雉5年（654）天皇は崩じ、殯を宮の南庭に行なった。続いて即位した斉明天皇は、飛鳥に都し、天智天皇は、対外関係の悪化から軍事上の考慮もあって近江の大津に都した。

壬申の乱（672）後、天武天皇は再度都を飛鳥に戻され浄御原宮を造営した。当時の難波は、天武6年（678）に摂津職の記事があることから、難宮のある重要な地と見なされていた。翌7年（679）には難波が築かれ、長柄豊碓宮が存続していたことがわかる。さらに11年（681）には都城宮室は一処にあらずという考えから、飛鳥の他に難波に都せんと詔し、政府官人には、難波に家地を請うよう命じている。これは、飛鳥浄御原令の編修が前々年から始られており、制度の確立、中国文化の模倣など当時のわが国の東アシアにおかれた地位を知る上にも興味ある問題である。ところが、その難波宮が、朱鳥元年（686）大蔵省から出火し、宮室のほとんどを焼失してしまった。（最近までの調査で明らかになった遺構のうち、古いものが、

この時に焼失した難波宮にあたるものと考えられる。）一方天武天皇なきあと、皇后が即位して持統天皇となられ、3年（689）に浄御原令の完成・施行、8年（694）には藤原京遷都と著々と律令国家体制は整えられていった。そして持統天皇のつぎの文武朝以降、難波の地へも再三の行幸があった。これからすると、さきの焼失後まもなく、少なくとも宮殿の一部は復興されたようである。

藤原京を中心とする持統・文武朝を皇統政治の時代とみると、元明女帝以下の平城京を中心とする時代を藤原氏の拍頭による貴族政治の時代と見ることもできる。

平城京遷都は和銅元年（708）に詔が出され、和銅3年（710）に実施された。これは大宝元年（701）の大律令の完成にみられる、律令体制による中央集権的支配の完成を目ざし、唐の長安に劣らぬ帝都の建設をはかるという意欲のあらわれであろう。

聖武天皇朝には神龜3年（726）に藤原宇合が知造難波宮事に任ぜられた。このころ難波宮の大規模な改築工事が行なわれたと考えられる。

（万葉集312）式部卿藤原宇合難波の塔を改め造らしめらるる時作る歌一首

昔こそ難波田舎と言われけり今は都引き都びにけり

（都引きは都を移しての意）

その工事に従事した雇民などの記録が正税帳や計会帳などに残されており、当時の一般民衆の負担の大きさがしのばれる。このようにした難波宮の造営も、天平4年（732）には一段落したが、ひきつづき、石川牧夫を造難波宮長官として工事は進められた。そして天平6年（734）には難波京の宅地の班給も行なわれ、市街地の整備が進んだことをしめしている。聖武天皇は恭仁京、紫雲宮、平城京を転々とされた後、天平16年（744）難波宮を皇都と定められたが、翌17年（745）には平城京へかえり、再び都を平城京にさだめられた。その後も元正天皇、孝謙天皇、聖武天皇、光仁天皇等の行幸があり、難宮として存続した。また難波津は遣唐使の発着はもとより、防人の集合、出発の場ともなり、古代国家における重要な位置にあったことは以前と変わらなかった。

難波宮の終末については、明らかでないが、延暦12年（793）に攝津職が廃止されているので、その直前ではないかとみられる。ちょうどその頃、長岡京の造営が困難をきわめ、完成しないまま延暦13年（794）に平安遷都が決定された。

その後も難波難宮の名は史上に見えるが、それまでの難波宮との関係等については全く明らかでない。



聖武朝難波宮出土の(左)蓮華文・唐草文軒瓦。(中)重圓文軒瓦。(右)調査のきっかけとなった陶尾(しび)の破片。しびとは宮殿の棟瓦の両端に置かれるもの。9ページの図版「唐招提寺金堂」にも見える



第5次発掘によって発見された聖武朝難波宮の溝。現在も市立ろう学校地下室に保存されている



聖武朝内裏、西外郭築地跡から出土の重圓文軒瓦。これは大阪放送会館の駐車場地下に保存されている(第14次)

発掘調査の経過

難波宮については、奈良時代の記録や文書にその記載はあっても、その所在場所は全く謎につつまれていた。江戸時代いらい地名考証等で研究が進められ、長柄豊碕宮については上町台地説と大淀区の淀川河岸の長柄とか豊崎の地を考える説に分かれていた。また聖武朝難波宮については、大正2年法円坂町の陸軍被服廠の倉庫建築の際、蓮華文・重圓文軒瓦が出土したことから、この地域とする説があったが、その一帯は陸軍用地であったため、調査をすることもできないまま終戦をむかえた。

大阪市立大学の発足とともに、山根徳太郎博士を中心に大阪城と難波宮の研究をテーマにした大阪城址研究会が設立された。その頃、法円坂町の東部に市営住宅の建設が開始されていた。連日パトロールを続けられた山根博士らは昭和28年11月に陶尾の破片を発見し、これをきっかけに昭和29年2月に第1次調査が開始された。

昭和30年、第3次調査を機会に、その名も「大阪城址研究会」から「難波宮址研究会」と改称されたが、調査は必ずしも順調には進まず、周囲の建設工事に追われながら、暗中模索の状態が続いた。そして発掘の成果については学界において異論も多く、また資金面での苦勞も絶えずきまっていた。

しかし博士の熱意と意思は多くの困難をものともせず、調査を続行し、第5次(昭和31年夏)調査の広小路町の市立雙学校内で凝灰岩溝を発見した。さらに翌32年春から夏にかけての第6・7次調査で初めて南北に連なる聖武朝難波宮の掘立柱の複廊の一部を確認し、第8次調査で、それと重なってそれより古い天武朝難波宮の複廊址も発見された。その柱穴にはどれもきまって焼壁や炭がまつまっていることから、天武天皇朱鳥元年に焼けた難波宮のものも推定できた。



聖武朝大極殿正面中央階段跡。小石数は建物や階段のまわりに敷かれていたもの



凝灰岩切石でつくられた聖武朝小安殿東側回廊の溝



難波宮が造営される以前に住んでいた飛鳥時代の人たちの、壺穴住居址から出土した土器の一部。左から、土甕（どすい・漁網のおもり）、提瓶（ていへい・水容器）、鉢（はそう・酒などを注ぐ器）。右端はかまどに釜をすえ、こしきを配したところ

続く第10次調査で、東西方向の聖武朝の回廊を発見し、南北方向の回廊と接合する東南の曲り角をおさえることができた。ついで西南隅を確認することを目標に調査が続けられ、ようやく第12次調査（昭和35年夏）で北へ折れまがる地点を発見した。この結果回廊は東西幅179メートル（602天平尺）におよぶ大規模なもので、平城・平安西内裏とほぼ同じ規模であることなどから内裏回廊であると推定できた。

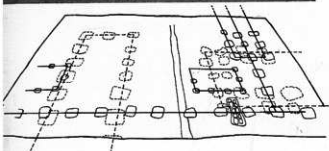
第13次（昭和36年春）では、聖武朝大極殿・小安殿の確認を目的とした調査を行ない、発掘地域の制限にもかかわらず、大極殿中央正面階段を発見し、大極殿の存在を決定づけた。またこれら遺跡の下層には、火災にあった建物址が発見された。これは第8次調査以来確認されている天武朝以前の難波宮の大極殿・小安殿である可能性が高い。

第14次（同年夏）調査では、聖武朝内裏回廊のさらに外

側に、おびただしい瓦堆積を発見した。これは築地塀の屋根が崩壊したものと見られ、軒瓦と軒平瓦が交互に向きをそろえて並んでいた。その一部は、合成樹脂硬化を行ない、再び埋め戻された。この時の調査では、難波宮造営に際して行われた整地層の下から、難波宮以前の住居址群が発見され、当時の人々が煮たきをするのに使った、かまどや、かめ、こしきなどが多量に出土した。

第15次（昭和37年春）調査では、大極殿回廊と朝堂院回廊の接続部を明らかにする目的で調査を進め、凝灰岩水抜溝の一部を発見した。またこの時発見した火災にあった建物址が、後に述べる第22次（昭和40年秋）調査の結果、藤原京より古い天武朝以前の難波宮の朝堂院の西第一堂にあたることがわかってきた。

第16次（昭和37年夏）・第17次（昭和38年春～夏）・第18次（昭和39年春）の調査の結果、聖武朝内裏正殿である



第21次発掘現場の全景。時代の異なる内裏地区の建物が重なって出土している。点線は、長柄豊碕宮および天武朝の遺構。実線は聖武朝の遺構



三笠宮殿下の古瓦御発掘 (1963.3.28)



米大使ライシャワー博士夫妻の視察。案内は山根博士 (1962.9.4)



第22次発掘による長柄豊碕宮および天武朝難波宮の朝堂院回廊跡

大安殿が発見され、その前庭にあたる建物も確認された。一方、古い方の難波宮の建物も南北に二棟があり、つなぎ廊下で連絡されていることも明らかになった。

第19次 (昭和39年夏) では、14次で出土した内裏の西側の外郭築地塀と対称の位置にある東の築地塀を調査し、第20次 (昭和40年春) では天武朝難波宮内裏地城回廊址と門址の調査を行った。

第21次 (昭和40年夏以降) では、聖武朝内裏内郭部の平安宮における宣陽殿・春興殿に相当する建物が確認できた。また天武朝難波宮においても、17・18次で確認した南北二棟の建物に付属すると考えられる遺構を発見し、その内裏地域の状況が次第に明らかにされつつある。

第22次調査の結果、聖武朝朝堂院の存在はもとより、天武朝難波宮の朝堂院も発見された。内裏地域の天武朝の柱穴同様、火災にあったことをものごたる焼壁、焼土、木炭

がみつっており、朱鳥元年 (686) に焼失した難波宮にまちがいない。また南北に延びる朝堂院回廊や朝堂の建物の位置関係が藤原宮に非常に似かよっており興味深いものである。

昭和35年いらい、大阪市長を会長とする難波宮址顕彰会が発足し、国・大阪府・大阪市の補助金や財界の寄付金で調査が進められてきた。しかし遺跡は都心部にあって、絶えず周囲の建設工事などにおびやかされている。そして次々と新しい成果を収めてはいるものの、なお今後の調査にまたねばならない点が多量に山積しているのが現状である。

調査の成果とその課題

古く応神・仁徳天皇の世に、難波におかれたと伝えられる「大別宮」や「高津宮」を別にすれば、難波宮と呼ばれている宮殿には、大化改新の頃から平安時代の初めまでの約150年間に、少なくとも次のような4回の造営があったことが『日本書紀』や『続日本紀』の記事からわかる。

第Ⅰ期 大化改新後に造営された孝徳天皇の「難波長柄豊碓宮」

第Ⅱ期 天武天皇の朱鳥元年焼失した「天武朝難波宮」

第Ⅲ期 朱鳥元年焼失後に再建された難波宮

第Ⅳ期 神亀3年から造営され、平安時代の初めまで続いた「聖武朝難波宮」

これまでの22次にわたる発掘調査によって、大別して前後二つの時代の宮殿が重なって発見された。一つは奈良時代の瓦を伴う宮殿、他の一つはそれよりも時代の古い、全面に火災に遭った痕跡のある宮殿で、前者がⅢ期の聖武朝難波宮に、後者がⅡ期の天武朝難波宮にあたることろが明らかにされた。また第10次以降の調査では、第Ⅰ期よりさらに時代の古い柱跡も発見されるようになった。法円坂町一帯は宮殿の造営に先だてて大規模な整地工事が行

なわれているが、その時期が大化改新ごろに推定できることや、天武朝難波宮よりも時代の古い宮殿の発見されたことなどからみて、ここに長柄豊碓宮のあったことは間違いない。さらに最近の調査によって、長柄豊碓宮は一部改築をうけたのみでほとんどそのまま天武朝にも利用され、それが朱鳥元年に焼失したのではないかと考えられるようになった。第Ⅳ期の難波宮については、現在までのところその遺構は十分確認されていない。

なお、この法円坂町一帯には、前記のような宮殿群と重なって、長柄豊碓宮の造営によって埋立てられた多くの飛鳥時代の住居跡が発見されていて、カマドやコシキなど当時の生活をうかがわせる貴重な資料が数多く出土している。また、ずっと後の戦国時代の石山本願寺の跡ではないかと思われる寺院址や、大阪城の礎石なども発見されている。

【長柄豊碓宮および天武朝難波宮】の遺構

これは、中国の都城制度を模して造られたわが国最初の本格的な都城である。しかし現在までに発掘されたのは、宮城の中心となる内裏にあたる地域と、大極殿や十二堂院を含む朝堂院の一部にすぎない。

内裏は天皇の常の御所であるが、単なる天皇常住の殿舎ではなく、授位・賜宴・外使接見の行なわれる政治の場である。

朝堂院は諸氏百官が一室に会して、即位の大礼、元日の朝賀の式、外使の謁見やそれにとりまう宴會など種々の朝儀を行なう場所で、天皇の高御座たかみくらのある大極殿、朝儀の場である十二堂院、控えの場である朝殿から構成されている。

これら主要な宮殿の配置は、北に内裏・南に朝堂院をおくわが国宮城の原則的な宮殿配置の、いちばん最初の形態を示している。また内裏と朝堂院が、後の聖武朝難波宮や平城・平安両宮の場合のように分離せず、ひとつながりになっている点も注目される。

この時期の宮殿は、すべて柱を直接地下に埋めてこむ掘立柱の方法をとっており、なかには直径70cm余の大きな柱を使っていたものもある。瓦の伴わないことからみて、板葺・検皮葺かカキ葺であったらしい。おそらく伊勢神宮などの神社建築にみられるような、わが国古来の建築様式が採用されていたと思われる。しかし一方では、宮の中心線がほぼ真南北に定められていて、多くの宮殿が中心線に関して対称に配置されているなど、高度の土木建築技術が採用されており、背後に補佐人技術者の指導が考えられる。

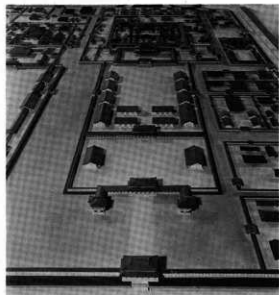
のちの聖武朝難波宮の造営には、奈良時代のいわゆる「天平尺」（約0.98曲尺）が使用されたことがあきらかであ



伊勢神宮内宮社殿



唐招提寺金堂



平城宮第2次朝堂院と内裏の復原模型

文化財保護委員会（奈良国立文化財研究所）所蔵



数次にわたって造営された難波宮の中核部付近。大阪城に隣接するこの地域一帯の宮跡を保存整備して緑地化することがのぞまれる

るが、長柄豊碓宮建物の寸法は「天平尺」はもとより「高麗尺」（約1.17曲尺）でも削りつけることができず、その造営にどんな尺度が使われたか謎になっている。全体として、聖武朝難波宮や平城宮・平安宮よりも大きな規模を持ち、ほぼ藤原宮に匹敵するものである。

「聖武朝難波宮」の遺構

発掘されたのは、「長柄豊碓宮および天武朝難波宮」の遺構と同様、内裏と朝堂院の一部にすぎない。内裏は東西179mの区域を架間2.4m・桁行2.98mの複廊でとり囲み、さらにその中央南部、内裏の正殿である「大安殿」を囲んで複廊と櫓がめぐっている。大安殿は東西9間（26.8m）南北4間（11.9m）の掘立柱の高床建築である。内裏回廊の外側には大築地があるが、その上に葺かれた屋根瓦の一部は、今もNHK放送会館駐車場の地下深く保存されている。内裏の南にある朝堂院では、大極殿を中心とする大極殿院と十二堂院の部分の発掘がすすめられている。大極殿は基壇の高さ約2m・東西約42m・南北21mの大建築で、南北両面に3カ所ずつ階段が設けられている。おそらく唐招提寺の金堂や、平安神宮の主殿にみられるような堂々とした大陸風の宮殿であったであろう。大極殿の北には小安殿も発掘されている。十二堂院では、十二の宮殿を囲む築地塀の一部と、西第一堂があきらかにされている。全体として、大極殿・小安殿の規模は長岡宮のそれに、内裏の規模は平城宮第2次内裏のそれに近似していることがわかってきた。

また、聖武朝難波宮でも掘立柱の回廊や宮殿が多いが、大極殿など一部の宮殿には礎石が使われたらしい。この時期になると、ほとんどすべての建物に瓦が使用されていて、華美文・唐草文や重層文などの美しい軒瓦がたくさん出土している。土間には磚が敷かれ、凝灰岩切石による基

壇の化粧が行われていて、長柄豊碓宮および天武朝難波宮がどちらかといえば神社建築の様式に近かったのにくらべて、聖武朝難波宮の建築はより大陸風のものであったと想像される。両者の宮城プランを比較してみると、その中心線が全く一致していることは注目されるが、規模や様式はもとより、宮殿配置もかなり違って、わが国の都城制度の変遷がしのばれるのである。

この聖武朝の難波宮は、平安時代の初めに長岡京や平安京への遷都にともなって廃止されたりしく、柱や瓦などは解体のうえ長岡京などの造営に使用されたようである。

これまでの22次にわたる発掘調査によって、「長柄豊碓宮および天武朝難波宮」と「聖武朝難波宮」の内裏と朝堂院の状況が次第にあきらかになってきた。とくに前者は、これまでの学界の常識では律しきれない宮殿配置を示していて、平城宮や平安宮の宮殿配置とはその様相を異にしている。将来その全貌があきらかになる時がくれば、藤原宮・平城宮に先行し、中国・唐長安の都城制にならって造られたといわれるわが国最古の本格的な都城として、また長柄豊碓宮から平安宮にいたる都城制度の変遷を知る上においても、その意義はさらに重大なものとなるであろう。聖武朝難波宮については、全体としてみれば平城宮や平安宮とその規模や宮殿配置に類似するものがあるが、細部については難波宮独自のものがあることがわかってきたのは大きい収穫である。

これまでの調査は難波宮の中核部である内裏と朝堂院地域に限られてきたが、今後はその地域の状況をできるだけあきらかにするとともに、周辺に存在したと推定される大蔵省をはじめとする官庁街の究明が大きな課題である。その成果は日本の古代史をあきらかにする上において数かぎりない貢献をすることになるであろう。（1966・3）

難波宮関係年表

天皇	年	代	遺構	難波宮	日本史																		
神德 仁	5世紀		難波宮造宮前住居址	難波に幸し、大隅宮に在す 難波に都す、高津宮という	古墳時代中期																		
欽明	6世紀	中葉		難波祝津宮に幸す	この頃仏教伝来																		
推古	593	推古元	第Ⅰ期	この間新羅・高麗・百済の使人を難波に饗する記事あり 遣隋使難波より発着す	聖德太子摂政（～621） この頃四天王寺建立 法隆寺建立・遣隋使の初め																		
	607	15			遣唐使出発す	遣唐使の初め																	
	608	16			都を難波長柄豊碓に移す 宮地に入る蘇および人に補償す この間難波の難宮の記事多し 新宮に遷り難波長柄豊碓宮と号す 難波長柄豊碓宮完成 中大兄皇子ら飛鳥にかえる 天皇崩じ兩廬に殯を行行 百済救援軍を率いて難波宮に幸す	大化改新																	
舒明	630	舒明2	長柄宮	百済救援軍を率いて難波宮に幸す	白村江の敗戦 大津京遷都 庚午年難 近江令(?)																		
孝徳	645 651	大化元 白雉元				第Ⅱ期	天武朝難波宮 難波に都せんと詔す 大藏省より出火宮室悉く焼く	壬申の乱・飛鳥浄御原宮に遷る															
齊明	652	白雉2	天武朝難波宮	難波に都せんと詔す 大藏省より出火宮室悉く焼く	浄御原宮発布 藤原宮遷都																		
	653	3							天武朝難波宮	難波宮に幸す 難波に幸す	大宝律令成る												
	654	4										天武朝難波宮	難波宮に幸す 難波に幸す	和銅開珎をつくる 平城遷都									
	655	5													天武朝難波宮	難波宮に幸す 難波に幸す	日本書紀成る						
660	齊明6	天武朝難波宮	難波宮に幸す 難波に幸す	和銅開珎をつくる 平城遷都																			
天智	663				天智2	天武朝難波宮	難波宮に幸す 難波に幸す	日本書紀成る															
天智	667				6				天武朝難波宮	難波宮に幸す 難波に幸す	和銅開珎をつくる 平城遷都												
	670				9							天武朝難波宮	難波宮に幸す 難波に幸す	日本書紀成る									
	671	10	天武朝難波宮	難波宮に幸す 難波に幸す	和銅開珎をつくる 平城遷都																		
弘文	672	弘文元				天武朝難波宮	難波宮に幸す 難波に幸す	日本書紀成る															
天武	678	天武6							天武朝難波宮	難波宮に幸す 難波に幸す	和銅開珎をつくる 平城遷都												
	679	7										天武朝難波宮	難波宮に幸す 難波に幸す	日本書紀成る									
	681	9	天武朝難波宮	難波宮に幸す 難波に幸す	和銅開珎をつくる 平城遷都																		
	683	11				天武朝難波宮	難波宮に幸す 難波に幸す	日本書紀成る															
686	朱鳥元	天武朝難波宮							難波宮に幸す 難波に幸す	和銅開珎をつくる 平城遷都													
持統	689										持統3	天武朝難波宮	難波宮に幸す 難波に幸す	和銅開珎をつくる 平城遷都									
文武	694		8	天武朝難波宮	難波宮に幸す 難波に幸す						日本書紀成る												
	699		文武3			天武朝難波宮	難波宮に幸す 難波に幸す	和銅開珎をつくる 平城遷都															
	701	大宝元	天武朝難波宮						難波宮に幸す 難波に幸す	日本書紀成る													
706	慶雲3	天武朝難波宮										難波宮に幸す 難波に幸す	和銅開珎をつくる 平城遷都										
元明	708			和銅元	天武朝難波宮						難波宮に幸す 難波に幸す			日本書紀成る									
元正	710			3		天武朝難波宮	難波宮に幸す 難波に幸す	和銅開珎をつくる 平城遷都															
	717		養老元	天武朝難波宮					難波宮に幸す 難波に幸す	日本書紀成る													
720	4	天武朝難波宮	難波宮に幸す 難波に幸す									和銅開珎をつくる 平城遷都											
聖武	725				神亀2						天武朝難波宮		難波宮に幸す 難波に幸す	日本書紀成る									
	726				3	天武朝難波宮	難波宮に幸す 難波に幸す	和銅開珎をつくる 平城遷都															
	732			天平4	天武朝難波宮				難波宮に幸す 難波に幸す	日本書紀成る													
	734	6	天武朝難波宮	難波宮に幸す 難波に幸す								和銅開珎をつくる 平城遷都											
	740	12													天武朝難波宮	難波宮に幸す 難波に幸す	日本書紀成る						
	741	13																天武朝難波宮	難波宮に幸す 難波に幸す	和銅開珎をつくる 平城遷都			
	742	14																			天武朝難波宮	難波宮に幸す 難波に幸す	日本書紀成る
	744	16																					
745	17	天武朝難波宮									難波宮に幸す 難波に幸す		日本書紀成る										
孝謙	752					天平勅宝4	天武朝難波宮	難波宮に幸す 難波に幸す						和銅開珎をつくる 平城遷都									
	754				6	天武朝難波宮			難波宮に幸す 難波に幸す	日本書紀成る													
	756		8	天武朝難波宮	難波宮に幸す 難波に幸す							和銅開珎をつくる 平城遷都											
	757		天平宝字元												天武朝難波宮	難波宮に幸す 難波に幸す	日本書紀成る						
淳仁	764		天平宝字8															天武朝難波宮	難波宮に幸す 難波に幸す	和銅開珎をつくる 平城遷都			
	766		天平神護2																		天武朝難波宮	難波宮に幸す 難波に幸す	日本書紀成る
	768		2																				
776	宝龜2	天武朝難波宮	難波宮に幸す 難波に幸す								和銅開珎をつくる 平城遷都												
桓武	784						延暦3	天武朝難波宮					難波宮に幸す 難波に幸す	和銅開珎をつくる 平城遷都									
	793					12	天武朝難波宮		難波宮に幸す 難波に幸す	和銅開珎をつくる 平城遷都													
	794			13	天武朝難波宮	難波宮に幸す 難波に幸す						和銅開珎をつくる 平城遷都											
桓武	784			延暦3											天武朝難波宮	難波宮に幸す 難波に幸す	和銅開珎をつくる 平城遷都						
	793			12														天武朝難波宮	難波宮に幸す 難波に幸す	和銅開珎をつくる 平城遷都			
	794			13																	天武朝難波宮	難波宮に幸す 難波に幸す	和銅開珎をつくる 平城遷都